

道徳教材を「人権」の視点でとらえる 人権教育部会

人権教育部会では、12月に淡路地区で授業研究会をおこないました。小学校4年生を対象に「よわむし太郎」（日本文教出版）の教材を使い、「人権の視点を大切にしたい道徳」というねらいで、授業研究をおこないました。

先だって、8月の教育課程編成講座で、この「よわむし太郎」の教材について富田稔さん（人権教育部会協力研究所員）から講話がありました。会場からも様々な意見が出され、授業で取り扱うにあたり十分な教材研究が必要な教材であると感じました。授業者からは、「指導書のままでは自分の中で腑に落ちない」、「太郎と子どもたちの関係性から何を学ぶのか」、「悩みに悩んで、授業の方向性がなかなか決まらなかった」と感想がありました。

最終的には、ねらいを「よわむし太郎と子どもたちの関係性を考えること」に決め、「気づき」をキーワードとしました。子どもたち一人ひとりにも「ちがいが」あることに「気づき」、自分たちも同じように一人ひとりが「ちがう」考えや思いをもっていることにも「気づいて」ほしい、「よわむし太郎」と子どもの関係性を考える中で自分の言動や他者の言動はどうあるべきだったのか考えて「気づいて」ほしいと、授業を組み立てました。



授業では、まず前時に話を読み、言葉や時代背景など疑問を出し合いました。「馬のわらじって何？」という言葉の疑問から「太郎はどうして森の中に一人で住んでいたのかな？」など、太郎の背景にせまった疑問も出ました。また、太郎と子どもたちの「関係性」については、「仲良しの関係」と捉えている子どもがほとんどでした。本時では、挿絵の中に登場してくる子ども一人ひとりをクローズアップし、それぞれの「子ども」について気持ちを考えました。そして、柿をぶつける1場面に登場しない「子ども」に焦点をあて考えることで、「いたずらはやりたくないな」、「いじめたらダメ」、「いやなことはいやって言ってほしい」など、さまざまな「気づき」が子どもから出てきました。最後の「よわむし太郎とよばなくなったのはなぜか」という疑問まではいかなかったのは残念でした。（後日続きをし、共有できました。）



研究協議では、富田さんから、「この教材は、4年生にとっては時代背景がつかみにくく、難しい言葉も出てくる。また、内容は同和問題にもつながる深い教材である。太郎は「森」の中で一人で暮らしており、子どもを介して社会とつながっている。その子どもが大切にしている鳥を失いたくないという思いもある。指導書にあることだけを鵜呑みにしていたら、大切なことを見逃してしまうが、よく教材研究されたうえでの授業だった」とのコメントをいただきました。参加者からは、「子どもたちがよく考えて、多様な意見が出されていた」、「1枚めの挿絵に登場しない子どもに着目させることで、一人ぼっちの太郎に寄り添おうとする子どもの気持ちを引き出すことができていた。自分たちがしているいたずらがいじめだと気づかせる視点が明確になった」など、活発な意見交流がなされました。「知らないまま、深く考えずに授業をするのはこわい」と改めて感じた教材でした。

人権教育部会では引き続き「人権の視点を大切にしたい道徳」の実践にむけて、研究をすすめていきます。

（本授業の授業案は「組合員専用ページ」⇒「各部会研究授業 指導案等」に掲載しています。ID・パスワードは各地域組合へお問い合わせください。）

★兵教組HP 組合員専用ページ⇒

